



代表取締役社長
齋藤 喜孝



型枠から土木、重機まで—— 練達の技術力で信頼を築く多能工集団



喜流一 株式会社

神奈川県横浜市港北区新吉田東 1-7-25 URL : <https://kiryu-yokohama.com/>



神奈川県横浜市に拠点を置く『喜流一』は、型枠工事を軸に、鉄筋、土木までこなす多能工集団だ。齋藤社長は16歳で業界に入り、技術を磨いて3年前に独立を果たした。高い技術力と「喜びを分かち合う」という社名に込めた想いを胸に、様々な工事に尽力している。今日は、そんな社長のもとをタレントの野村将希氏が訪問し、お話を伺った。

——まずは、齋藤社長の歩みから。

私は神奈川県横浜市の出身で、育ったのもこの街です。学業修了後、16歳の時に建設業界の門を叩きました。最初は意職としてキャリアをスタートし、その後18歳のころから型枠大工としての仕事がメインになりました。現在は、型枠工事を中心に、トンネル工事や護岸工事、さらにはコンクリートの防波堤建設など、土木・建設の幅広い現場に携わっています。——16歳からこの道一筋でいらっやるんですね。転職を考えられたことはなかったのですか。

ええ、考えませんでした。もちろん、仕事ですからつらいことや大変な経験もありましたが、それ以上に楽しいという気持ちが強かったです。私にとって、この仕事は自分に合っていたのだと思います。

——その後、独立して『喜流一』さんを立ち上げられた経緯を教えてください。

個人事業主として『喜流一』を立ち上げたのは、約3年前のことです。そして昨年5月に法人化を果たしました。実は独立する直前まで勤めていた会社は、創業から20年近い歴史があるところでした。私はその社長に対し、筋を通すつもりで「子会社として独立させてほしい」と相談したのです。しかし、私の思いが上手く伝わらなかったのか、あるいは何か勘違いをされてしまったのか、協力を得ることができませんでした。そして、それならば自分の力でやってみようという決意し独立に至った次第です。

——実際に経営者として歩み始めてみて、いかがでしたか。

独立に際して周囲の方々に相談すると、皆さん口を揃えて「社長業に向いているよ」と背中を押してくれました。自分の腕一本でやっていく技術的な自信はありましたが、周囲の言葉が大きな励みになりましたね。とはいえ、大変なことの連続でした。特に最初は建設業許可を持っていなかったため、受注できる仕事に制限がありました。以前の会社ではいわゆるスーパーゼネコンとの取引がメインでしたが、そうした大きな現場に入るには許可が不可欠なのです。そのため、規模の小さな仕事を途切れないように確保し続ける日々が続きました。法人化したのは、そうした大きな仕事、責任ある現場に再び挑戦したいという想いがあった

からです。

——現在の『喜流一』の強みは、どのような点にあるとお考えですか。

一番の強みは、型枠工事をメインとしながらも、足場仮設や鉄筋の組み立て、さらには重機やパワーショベルの操作まで、一社でほとんどすべての工程を賄える点です。私自身が多種多様な資格を保有していることもあり、複数の業者を介さずにワンストップで施工できる機動力があります。これはお客様にとっても大きなメリットになります。

——なぜ、それほど多くの技術を身につけることができたのでしょうか。

実を言うと、私はもともと一つのことをずっと続けていると、すぐに飽きてしまうタイプなんです(笑)。それで「あれもやりたい、これも知りたい」と好奇心に任せて色々なことに挑戦しているうちに、自然と資格が増えていき、何でもこなせるようになっていました。飽き性だったことが、結果として「多能工」という強みに繋がったのです。また、私自身、細かいことが気になる性格で、現場でも小さな部分にまでこだわって丁寧に仕上げてしまいます。それが結果として、お客様の信頼に繋がっているのかもしれない。

——お仕事の内容も、非常に社会的意義の高いものが多いとお聞きしました。

最近では、JR山手線の踏切を解消するための架橋工事に携わりました。その最後の橋の土台部分を私たちが作ったのです。この工事が完了することで、山手線は

いよいよ自動運転の切り替えへと進んでいきます。日本の大動脈である鉄道の未来に関われたことは、大きな誇りですね。また、東京オリンピックの際には、水上競技の会場となった「海の森公園」の整備も手掛けました。

——技術が認められたからこそ、そうした大きな工事に携わることができるのでしょうか。

また、有難いことに、私は周囲の方々に本当に助けられています。「社長は人柄で仕事を取ってきているね」とよく言ってもらえるくらいです。『喜流一』という社名も、関わってくださる皆さんと喜びを分かち合いたい、という想いから名付けました。私たちが施工したことで、皆さんに喜んでもらえるのが一番の幸せです。

——過去には難しい現場もあったのではないですか。

最も記憶に残っているのは、首都高速道路に関連するトンネル工事です。これは世界初の工法を用いた現場で、本当に眠る暇もないほど過酷でした。シールドトンネルの機械を通した後、地中でその空間を拡張するという特殊な工事です。計画書はあるものの、前例がないために「本当にこれで大丈夫なのか」という不安と戦いながらの作業でした。私たちは常に、そうした特殊で難易度の高い現場に挑んできた自負があります。

——最後に、これからの展望をお聞かせください。

まずは従業員を30名規模まで増やしていきたいと考えています。もともと私がいた世界であるスーパーゼネコン各社とお付き合いできるように、また今まで支えてくださった関係各社さまのご期待に引き続き添えるように体制を整え、10年かかるような大きなプロジェクト、未来

に残る仕事に挑戦していきたいです。そのためにも、現状に満足せず、生涯勉強だと思ってレベルアップし続けていきたいですね。皆と一緒に成長し、楽しみながら、より大きな喜びを分かち合える会社を目指します。

(2026年4月取材)

column

▼齋藤社長は、技術力だけでなく人材育成と福利厚生についても尽力している。教育面では「綺麗に、確実に、丁寧に」を徹底し、何より安全を最優先。福利厚生では週休二日制を導入し、給与も相場より高く設定。若者が金銭的・不安なく結婚や子育てといった将来を描ける環境を整え、業界の意識改革を促している。また、資格取得支援では個々の「楽しさ」を重視し、適性を伸ばす方針だ。本人の意欲に応じて、重機や足場など様々な分野において全面協力体制を敷く。

▼こうした手厚い支援は、人材の成長こそが企業の競争力に繋がるという確信に基づいている。独立時に前職から3名のスタッフが同行した事実は、社長への信頼の厚さを物語っているといえよう。喜びを分かち合うという社名の通り、社員の幸福を土台とした組織づくりが、同社の高い施工品質と揺るぎない信頼を支えているのである。



「対談中、何度も周囲の方々への想いを語ってくださった齋藤社長。その様子からも、仲間たちをどれほど大切にしているのかが伝わってきました。そんな社長の想いを、周囲の皆様もちゃんと受け取っていただけることでしょうか。これからは皆一丸となって、より高みへと成長していきたく思います。陰ながらではありますが、私も応援していますよ！」

野村将希・談